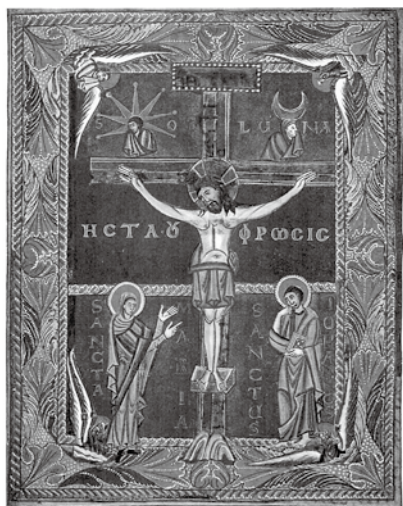


Über das Licht in der Malerei,
絵画に現れた光について



ヴォルフガング・シェーネ 著
下村耕史 (九州産業大学教授) 訳

■B5判 上製函入 本文340頁 カラー6頁 挿図26点

■定価 25,200円(本体24,000円+税)

ISBN978-4-8055-0604-2 C3070

キリストの磔刑／ハインリヒ二世の典礼書、1002/14年

ドイツの美術史家であり、ベルリン国立絵画館学芸員をへてハンブルグ大学の教授であったヴォルフガング・シェーネ(1910-1989)が、1954年に刊行した絵画に現れた光をテーマに論究した名著である。中世・近世・現代という西洋の大きな時代区分の絵画の様々な光の種類を理解し、ことに中世絵画から発する画中光の歴史と問題点の流れを追って、その光の形而上学の意義を明確にしながら、芸術に現れた光の歴史を精緻な分析で記述した類例のない貴重な文献であり、光と絵画についての歴史的な根本資料である。

序言より

オットー朝刊本彩飾画独特の一面の淡い色、フランス大聖堂のステンド・グラス、金地の現象、14世紀から16世紀までの絵画的主題のタペストリー、ラファエッロ、カラヴァッジオ、ルーベンス、1800年以降の絵画、色彩その他についての研究から、私は次第に西洋絵画に現れた光について考察するようになった。それを確認し、考察の意味を説明する試みにおいて、私は次のような周知の事実に出会った。即ち、後期古代絵画が陰影を知っていたにも拘わらず、中世絵画では近世絵画と対照的に陰影がないこと、および現代絵画では陰影が再び消えてしまったことである。それが私の研究の出発点となった。中世、近世、現代という西洋の大きな時代区分の絵画の様々な光の種類を理解し、その流れを追いつつ意義を明確にしながら、その歴史を大きな特徴で記述するようにできればと思っている。このテーマについて徹底して論じきるということはない。私はただ問題を提起し、私に特に興味深く啓発的に思える、画中光の歴史の幾つかの章と問題点に読者の注意を喚起できるにすぎない。その際、私が心がけたことは、第二次大戦後に再び自分で見ることができた美術作品をおもに取り上げること、十分に原作を見ることができなかったものに対しては上記と異なる研究上の一線を引くことである。光も色彩も自分の眼で判断することが特に重要であるので、複製を見てこの問題と美術作品について誤った推論をなすより、こうして生じた欠陥の方が害がすくないと私には思われる。(抜粋)

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱い



キリストの昇天／ハインリヒ二世の
典礼用福音書、1007/14年

〔著者略歴〕

Wolfgang Schoene (ヴォルフガング・シュエネ)

1910年2月11日にマールブルクに生まれる。1989年8月17日にハンブルクで亡くなった。ミュンヘン、ブライスガウのフライブルク、ゲッティンゲン、ベルリン各大学で学んだ後、1934年にフランクフルト大学(アム・マイン)で博士号の学位を取得した。1936年から1937年までベルリンのナショナル・ギャラリー(Nationalgalerie)で無給助手として働きながら、ドイツ学術協会の奨学金を得た。1943年にブライスガウのフライブルク大学で教授資格を取得した。1945年にハンブルク大学の講師となり、1947年に同大学の正教授(Ordinarius)に就任した。1964年から1966年までハンブルクのヨアヒム・ユンギウス学術協会(Joachim Jungius-Gesellschaft der Wissenschaften Hamburg)の副会長を務めた。

〔訳者略歴〕

下村耕史(しもむら・こうじ)

1942年福岡市に生まれる。美術史家。九州産業大学芸術学部美術学科教授。九州大学文学部哲学科(美学美術史専攻)、同大学院修士課程修了。ドイツ、ミュンヘン大学留学。文部科学省21世紀COEプログラム「九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」拠点リーダー。著書に『デューラー』(講談社)、『アルブレヒト・デューラー「人体均衡論四書」注解』(中央公論美術出版)、『アルブレヒト・デューラーの芸術』(中央公論美術出版)、『アルブレヒト・デューラー「絵画論」注解』(中央公論美術出版)、『アルブレヒト・デューラー「測定法教則」注解』(中央公論美術出版)訳書に『北方ルネサンスの美術』(オットー・ベネシュ著、共訳、岩崎美術社)、『デューラー』(ペーター・シュトリーター著、共訳、中央公論社)、『芸術と進歩』(E.Hゴンブリッチ著、共訳、中央公論美術出版)、『ヤン・ファン・エイク「ヘントの祭壇画」』(ノルベルト・シュナイダー著、三元社)など。

目次

序言

序論

中世および近世絵画の画中光に関する暫定的概念規定のための比較

シニョレッリの「大きな牧羊神」

ハインリヒ二世の典礼用福音書:「キリストの昇天」

概念形成

研究の課題と方法

第一章

自発光:初期および盛期中世の画中光

オットー朝の絵画:色彩と光

オットー朝の絵画:金と金地

オットー朝の絵画:モデリング

ロマネスクの絵画:中世の現場の光

13世紀のステンド・グラス芸術

モザイク、初期キリスト教の現場の光、自発光の成立

中世の画中光の意義

第二章

自発光から照明光への変化:14-15世紀の画中光

前書き

光、陰影、色彩

14世紀の画中光と現場の光

色彩地、金、金地

ステンド・グラス、絵画的主題のタペストリー、版画

第三章

照明光:15-18世紀の画中光 (ルネサンス、マニエリスム、バロック)

前書き

16-18世紀絵画の光、陰影、色彩に関する原則

照明光の最初の世紀(およそ1420-1530年)

16世紀のイタリア絵画とエル・グレコの画中光

カラヴァッジオ

17世紀の画中光:カラヴァッジオの後継者、

人々による照らす光

17世紀の画中光:自然の照らす光

17世紀の画中光:宗教上の照らす光

レンブラント

18世紀の画中光

近世の画中光の意義

第四章

19-20世紀の画中光

前書き

19世紀絵画の光

19-20世紀絵画の色彩と光

(中世から現代絵画までの光と色彩の関係についての考察を含む)

19-20世紀の画中光の意義

補遺

色彩と光の現れ方について

実験心理学の成果と絵画に現れた光の美術史的研究に関する意義

§1. 序言

A. 色彩と光の現れ方についての実験心理学の研究成果

§2. 客観的な色彩、有彩色と無彩色、色彩の秩序

§3. 色彩の現れ方

§4. 色彩に関する照らしと輝きの現象

§5. 空虚な空間の照らし

§6. 色彩の美的な現れ方

§7. まとめ

B. 西洋絵画の光・色彩・現象の理解のために、色彩と光の現れ方を論じる意義

§8. 絵画の光学

§9. 16-18世紀の絵画

§10. 中世絵画

§11. 15世紀の絵画

§12. 19世紀と現代の絵画

C. 現場の光の問題

§13. 前書き

§14. 色合いのない照明のもとでの、無彩の表面色

§15. 色合いのない照明のもとでの、有彩の表面色

§16. 有彩色の照明のもとでの、有彩の表面色

§17. 昔日の絵画の現場の光

D. 美術館の問題

§18. ワニスとガラスの被い

§19. 明るい壁上の絵画作品の展示

後書き

索引

参考文献一覧(著者索引付)

I. 古代と中世の著作家

II. 近世以降の文献

美術作品と美術家リスト

I. 作者不明の美術作品

II. 美術家とその作品

概念と事項リスト

図版・挿図リスト

第二版(未改訂)の後書き

文献リスト補遺(1961年)

訳者あとがき



ジョルジュ・ラ・トゥール:聖アンナによる
新生児キリストの礼拝。1645年頃